

国内研修成果報告書

島前合宿 2016

8月24日から30日までの7日間、島根県・隠岐諸島にある島前地域において島前合宿を実施した。島前地域とは、中ノ島（海士町）、西ノ島町、知夫村の3島を合わせたときの呼び名である。今回はほとんどの時間を西ノ島町で過ごした。昨年度の企画に引き続き2年連続の参加となり、今年度は運営メンバーとして企画の段階から島前合宿に携わることができた。そのため昨年以上に「島前合宿を実施する意義」、「島前地域がどういう場所なのか」、「地域を訪れて活動すること」などについて深く考えることができた。また、島前合宿の企画内容を昨年度から大幅に変更したため、多くの不安を伴いながらスタートした合宿でもあった。

島前地域は、東京からバスで12時間、その後本土から島へ渡るフェリーに2時間半乗るという移動に時間を要する地である。そのため、島に着いた日には合宿内で行う企画の確認をする程度にとどめ、翌日に備えた。

今年度は3つの学習企画と1つの文化体験を行った。最初に行ったのは、西ノ島中学校との交流授業だ。西ノ島中学校は西ノ島町にある唯一の中学校である。今年度から新校舎が誕生し、小学校と中学校の機能が一つの建物に集約されていた。今後、さらに小学校・中学校での学びを一体化させていこうとしているようだ。今回の交流授業は、西ノ島中学校の3年生の生き方学習の一環として企画されたものであり、20名を対象にして行われた。中学生側のねらいとしては、「大学生がどんな目標を持ち、どんな学習をしているのかを知り、自分のこれからの生き方や今努力することについて考える」、「グループ活動を通して、自分の考えを表現する力を養う」の2点だった。離島という特殊な環境のもとで育つ中学生にとっては、大学生と関わる機会がほとんどなく、高校や大学への進学、またその後の進路選択についてあまりイメージできないようだ。そのような状況の中で東京の大学に通う大学生と話をすることで、高校や大学へのイメージを膨らませていくのが目的である。交流授業の流れとしては、中学生と大学生が1対1、もしくは2対1のペアをつくり、中学生の質問に大学生が答える形で進めていった。大学でどのようなことを勉強しているか、どんな夢に向かって学んでいるかなど、大学生活をどのように過ごしているかに加え、大学生自身が中学・高校時代をどう過ごしてきたかに至るまで幅広く聞かれた。大学生にとっては、自分自身が今までどのような人生を歩んできたのかを振り返る機会になるとともに、現在の大学生活を見つめ直し、どんな将来を描いているのかを考えられるようにした。大学生の答えを聞いた中学生は、考えたことや感想をまとめて大学生に伝え、自分の将来を考えていく。そして、ポスター形式にまとめ、ペアを3つ合わせたグループでそれぞれ発表した。全体を通して大学生の立場は、中学生の意見がまとまらないときのサポート役であった。本来、大学生側のねらいとしなければならなかったファシリテーシ

ョンの能力をつけることについてはほとんど実践できなかつたように感じる。昨年度も西ノ島中学校との交流授業は実施したが、中学校側の担当の先生が変わったこともあり、若干授業の進め方が変わっていた。先生が時間配分を決め進行していたが、その役割を大学生が担い、ただ質問に答えるだけにならないようにしなければならなかつたのではないかと思う。個人的には、現在に至るまでの高校生活や、今どのような学習をどんな意識でしているのかをしっかりと考えることができ、またそれを中学生に伝えるとといったことはできたと思う。ただ、中学生の意見をさらに引き出すようなアプローチが出来ていればよかつたのではないかとも感じた。

同日の午後には、島前地域の第一次産業に実際に触れることを目的に、西ノ島町の基幹産業である畜産を行う農家の方からお話を伺った。農業や畜産のことを深く知らない自分にとっては新たに知ることが多く、また島全体の産業についても聞くことができた機会となった。ただ、地域のまちづくりの一つとして産業のことも知ってみたいという浅い理由で訪ねてしまったため、畜産についての知識がほぼなく、お話ししてくださった方に対して積極的な反応ができなかつた。これは個人の反省であると同時に、参加者にしっかりと学びの場を提供できなかつた運営メンバーとしても大いに反省しなければならなかつたと考える。

翌日は島前地域の文化体験として、現地のお祭りであるキンニャモニャ祭りに参加した。しゃもじを両手に持ち1時間にわたりキンニャモニャ踊りを踊り続ける祭りである。飛び入り参加として、途中から一緒に踊ることができた。この祭りは中ノ島と言われる海士町で開催されるが、島前地域としてのイベントであることから、他の2島からも多くの人を訪れていた。島で生活を送られている方ともお話をすることができ、現地の方と交流する貴重な機会になった。

島前合宿も後半に入った次の日は、島内観光をした。合宿参加者が海士町、西ノ島町、知夫村の3島の中から行きたい島を選び、自分たちで行動スケジュールを立てるようにした。ただ観光するだけでなく、地域の人とたくさん話すこと、もしできるようなら一緒に写真を撮ってもらうことなどを課題とし、楽しむ中でも地域に入って活動をしていることを意識させるようにした。しかし、生憎の天気となつてしまい3島すべてにおいて計画通り進めることができず、課題も全くと言っていいほど取り組むことができなかつた。観光は学習企画とメリハリをつけられるものであつたため、あまり楽しむことができなかつたのは非常に残念だつた。

最終日は、西ノ島町役場の地域振興課から観光商工係、定住促進係、農林水産係の各係長をお招きして意見交換会を実施した。西ノ島町の概要説明をしていただき、その後質疑応答をするという形をとつた。個人的には、今回の合宿を通じて最もわかりやすい形で知識をつけることができたものだと思う。役場に勤められ、行政という立場からまちづくりに関わられている方から直接お話を伺える場を作ることができたのは、今回の合宿で成功したと思つたことのひとつであつた。お話ししてくださつた内容も産業のことにはじまり、

福祉、観光、伝統文化と多岐に渡っていた。普段、ゼミ活動の中で取り組んでいるようなテーマもあり、興味深い話が多かった。質疑応答の時間には積極的に質問をすることもでき、中身の濃い企画となった。昨年度には行っていない企画だったので、どのように進行するのか不安はあったが、参加者全体が質問をすることもでき、何かしら得ることができたのではないかと思う。

5日間の日程の中で様々な企画を実施し、またお祭りや観光をするなどとても充実した時間を過ごすことができた。昨年の島前合宿に参加してからまた島前を訪れたいと思っており、それが実現することができて非常に良かった。1年生として先輩にくっついていただけだった昨年から立場も変わり、運営として今年の島前合宿に参加したが多くのことを学ばせてもらったと思う。4月ごろから島前合宿のための準備をスタートさせ、参加者の募集、企画の決定、島の方とのアポ取りなどやることはいろいろあった。一緒に運営メンバーをやってくれていた人たちが頼りになり、仕事をまかせっきりだったと合宿が終わってから感じた。長い時間をかけて準備してきた島前合宿が終わった後は達成感を感じると同時に準備不足や細かい部分まで気を配ることのできなかつた甘さも感じた。来年度、同じように島前合宿を実施するかはわからないが、今年の実験を踏まえ、引継ぎをきちんと行うか、もしくはもう一度島前合宿に関わりたいと思っている。島での生活は、自然に恵まれ、人の優しさにあふれている。自分の地元でのものと全く異なるものであり、日頃感じることでできない暮らしができたことも貴重だったと感じる。今回の経験をゼミや今後の学習に活かしていきたい。最後に、この島前合宿を実施するにあたり一緒に活動した運営メンバー、参加者、そしてお世話になった島の方々、国内研修の制度で支援していただいた学部へ感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。